

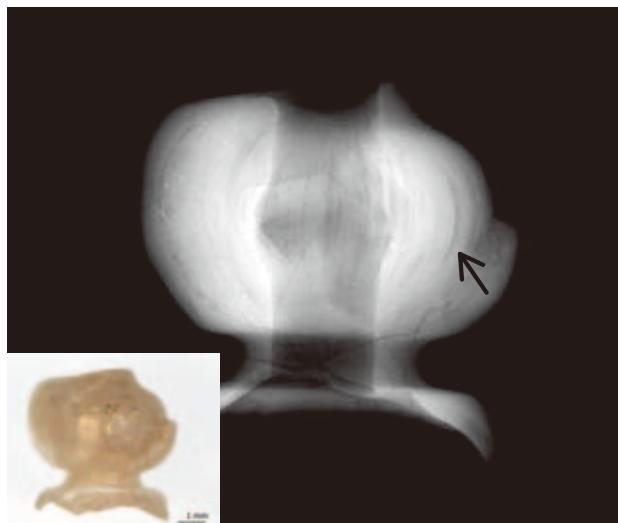
重層ガラス玉の材質・構造調査

京都府長岡京市の宇津久志1号墳から出土した重層ガラス玉の材質・構造調査を実施しました。X線透過撮影による内部構造調査の結果、孔の形状が中央付近で内湾していることや、気泡が孔と同方向にガラスの曲面に沿って細長く伸びていることがわかりました。これらのことから、本重層ガラス玉は、軟化したガラスを引き伸ばして製作した径の異なる2本のガラス管の間に金属箔を挟みこんで加熱し、工具で括れを入れることにより連珠として製作されたと考えられます。このような高度な技法で製作された重層ガラス玉は、1～3世紀頃の黒海周辺地域の遺跡から多く発見されています。

材質については蛍光X線分析法による非破壊測定を実施しました。その結果、金属箔は金(Au)、ガラスの種類はナトロンガラスであることがあきらかとなりました。ナトロンガラスとは、ソーダ石灰ガラスのなかでも融剤にエジプトなどで産出するナトロンと呼ばれる蒸発塩(天然ソーダ)を利用したと推定されているガラスのことで、ローマ帝国などで盛んに製作されたことが知られています。更に、ローマガラスで消色剤として多用されたアンチモン(Sb)が検出されました。

このように本資料は製作技法・化学組成の両面からローマ帝国領内で製作されたガラス玉である可能性が高いと考えられます。今後、国内外の資料の類例調査が進むことで、日本で流通した重層ガラス玉の種類やその流入経路についてもあきらかになるものと期待されます。

(埋蔵文化財センター 田村 朋美)



ガラス曲面に沿って細長く伸びた気泡が確認できる

第36回世界遺産委員会概要

2012年6月24日から7月6日にかけて、ロシア連邦サンクトペテルブルク市において第36回世界遺産委員会が開催され、奈良文化財研究所から2名が参加しました。ここではその概要を報告します。

世界遺産委員会は年に1回開催され、世界遺産一覧表への記載などの主要な事項はここで決定されます。委員会のメンバーは、世界遺産条約(正式名称：世界の文化及び自然遺産の保護に関する条約)締約国総会において選挙で選ばれる21の委員国ですが、そのほかにも諮問機関、委員国以外の締約国、遺産関係の専門家などが多数参加します。

議事は、①危機遺産リストに記載されている遺産の状況や危機遺産リストからの削除、②世界遺産の保存状況、③世界遺産一覧表への新規記載、の3つが大部分を占め、①については、フィリピンのコルディリエーラの棚田群など2件が危機的状況を脱したとして危機遺産リストから外れました。②に関しては、保全状況や開発による環境の悪化、地域紛争などの理由により、英国のリヴァプール海商都市をはじめとする5件が危機遺産リストに記載されました。③については、今回は日本からの推薦案件はありませんでしたが、新たに26件(自然遺産5件、文化遺産20件、複合遺産1件)が世界遺産一覧表に記載され、これにより世界遺産一覧表への総記載件数は962件(自然遺産188件、文化遺産745件、複合遺産29件)になりました。

1972年に採択された世界遺産条約は、今年40年という節目の年を迎えました。11月6日から8日には京都市において「世界遺産条約採択40年記念ユネスコ最終会合」が開催されることになっています。

(文化遺産部 青木 達司／企画調整部 田代 亜紀子)



第36回世界遺産委員会の様子